

2.2 失語症者のラジオニュースの理解実験¹

はじめに

本節は、前節で述べた日常場面の理解という側面を、より実証的に検討するものである。日常では、異なった形態や目的をもつ各種の談話や対話がある。談話中の文の長さに限ってもニュース解説が 21 文節、座談会の対話が 5.5 文節と大差がある(国立国語研究所, 1955)。ところが、前節の諸研究ではこの点が考慮されておらず、小学校高学年程度の読み物を、普通の速度よりも遅く呈示していることが多い。このため、得られた結果が日常のどんな談話の、どの程度の理解力を推測させるかが不明のままである。Wilcox ら(1978)がビデオで現実的な場面を設定し、その状況の中での依頼文の理解力を調べたように、特定の談話や場面をその特性にそって検討し、日常場面の理解力を推測するのも一法であろう。

従来、日常場面の理解力は、常識や状況判断等の介在(De Beaugrande, 1980)を極力排除した失語症検査から検討されてきたが、それでは推定が困難であるとして(Martin, 1977)、Communicative ADL (Holland, 1980)や実用的コミュニケーション検査(綿森ら、1987)が開発された。しかし、これらは軽度の失語症者が日常や職場で接する、より複雑な刺激の処理能力までは対象としていない。

そこで、主に軽度失語症者を対象に、日常接する談話の一つである、ラジオニュースの理解力を検討した。理由は、ラジオやテレビのニュースは日常生活における最もありふれた談話の一つであり、ニュースから情報を得るのは情報交換の基本的手段の一つでもあるからである

¹ 本節は以下の文献をもとにした：安田清ら，失語症者のラジオニュースの理解，音声言語医学，31，(1)，3-10，1990.

(Woodall et al., 1983)。その他、(1)予備調査した失語症者全例が、ラジオやテレビニュースに毎日接していた。(2)発話速度、構成等が定型的で、国民一般を対象とする。(3)健常者のラジオニュース(以下ニュース)の理解力は報告がある(放送文化研究所,1950; Dixon et al., 1982)が、失語症者ではまったくくない。(4)日常よく話題となり、訓練用教材として使える等である。

そして、無修正のニュースは単独文よりも良好に理解されるか、健常者との理解力の差、失語症のタイプによる差、SLTA失語症検査の聴理解検査等とニュースの理解との相関などを検討した。

方法

1. 素材

NHK 第一放送より、1-2 分の長さで、内容の理解に専門的知識や個人的な興味を要さず、5-8 個の異なる数値を含んだニュース 3 題(地震で死んだ子の親が訴訟、農協職員の横領、ダムの建設をめぐる計 4 分 7 秒)を選び、カセットテープに録音した。

2. 設問と解答

1)各ニュースにつき 10 問を設けた。ニュースは、いわゆる 5W1H が中心のため、質問は四つのカテゴリーで構成した。「主題」What (一連の経過の前提となる出来事)。「内容」who、where、what (法人名地名、物件、行事等)。「理由」why、how (因果関係や説明等)。「数値」when、how much(月日、金額、割合等)。ニュースは無修正としたため、カテゴリー別質問数の割合は三題間で異なる。3 題の総質問数は「主題」が 3、「内容」が 8、「理由」が 5、「数値」が 14 の計 30 問である。

2) 解答は四者択一とし、正答はニュース中に使われた、または意味が同じ語や文で、他は文脈的に妥当だが、正答とは明確に異なるものとした（表 1）。

3) 質問の難易度は、天井効果を防ぐため、予備検査における 7 名の健常者（平均 27.2 才）の正答率が約 80% になるようにした。

（表 1 参照）

4) 質問の呈示は放送文化研究所と同様、一つの質問と四選択肢を B5 用紙 1 枚に縦書き、ニュースの文脈にそって質問した。正答は一点で、三十点満点とし、各ニュース間の比較は行なわない。

3. 対象

健常者壮年群：20 名、平均 36.8 才。

健常者年代一致群 44 名：平均 51.2 才で、失語症者全体と年代が一致する健常者群。

失語症者群：失語症者で脳出血 23 名、脳梗塞 21 名。全例初回発作で、発症後 2 ヶ月以上経過した意識清明な右利き、左半球損傷。検査上障害となる視力、聴力等の問題がなく SLTA 短文理解（聴）が 6 点以上の失語症者。失語のタイプは自発話や、損傷部位、SLTA の結果等より担当 ST が非流暢群と流暢群に分類した。重症度は SLTA の口頭命令の正答が 6 点以上を軽度（平均 7.7 点）、それ以下を中度（平均 2.5 点）とした。従って失語症者群は四群からなる：

1) 軽度非流暢群 11 名（平均 51.3 才）、2) 軽度流暢群 11 名（51.8 才）、
3) 中度非流暢群 11 名（50.4 才）、4) 中度流暢群 11 名（52.8 才）。

4. 手順

1) 検査は静かな部屋で、個別に行なった。

- 2)次に「後で質問しますからよく覚えておいて下さい」と言い、施行法の理解と音量の適切さを確認するため、練習用ニュースをカセットテープで聴かせた。
- 3)聴取後、検者が質問紙を見せながら質問と選択肢を音読し、15秒以内に指示させた。正否は教えなかった。
- 4)本題は疲労感の蓄積を防ぐため、時間の最も長いAニュースから順に、約3分の休憩を挟んで三題を与えた。以上の手順に約25分を要した。

5. 検査の信頼性

- 1)本検査とは異なる10名の健常者(平均20.7才)に質問と選択肢のみを見せ、正答を予想させた。平均8.3/30点でChance levelの7.5/30と有意差がなかった($p>.05$)。
- 2)別の健常者10名(平均20.5才)に4カテゴリーの基準を提示し、質問を分類させた。一致率は96.3%であった。
- 3)本検査の1ヶ月後に、健常者壮年群より4名、発症後9ヶ月以上経過した失語症者群より4名(軽度非流暢群3名、中度非流暢群1名)計8名を再検査した。再検査時の得点の方が平均1.38高かったが、t検定で有意差はなかった($p>.05$)。
以上より、本検査は信頼性があると判断した。

結果

各群の間でニュース平均得点間のt検定を行なった。健常者壮年群は他群よりも有意に優れていた。健常者年代一致群と軽度非流暢群との間には、有意な差がなかった。その他の失語群に対しては、健常者年代一致群は有意に優れていた。失語症者群の比較では軽度、中度とも非流暢群が流暢群より高得点だったが、有意差には至らなかった。

図 1 は健常者二群と軽度失語群（流暢、非流暢）、中度失語群（流暢、非流暢）の 4 群の得点分布を示す。失語症者群の 48% (21 人) が、健常者壮年群の最低点（19 点）以上を得点した。更に、失語症者群の 61% (27 人) が健常者年代一致群の最低点（16 点）以上を得点しており、健常者群との重なりが目立った。

（図 1 参照）

質問のカテゴリー別正答率は全群とも「主題」の正答率が最も高かった。次いで「内容」、「数値」、「理由」の順で全群とも正答率が低下する傾向がみられた。

ニュース得点と他の検査とのピアソン相関係数は、軽度失語群においてのみ、SLTA 口頭命令とニュース得点の間に 0.50 の弱い相関がみられた。

考察

軽度非流暢群の SLTA 口頭命令の平均は 7.7 点で、明らかに単独文の理解に障害を示すが、ニュース得点では健常者年代一致群と有意差がなかった。また、失語症者全体の 61% が、健常者年代一致群の最低点を越えていたことに驚かされた。これは失語症者が単独文よりも談話を良く理解するという先行研究を支持するとともに、日常のニュースに関しても、良好に聴取している可能性を強く示すものであろう。

この理由は、失語症者が談話中の冗長性の助けにより得られた各情報 (Stachowiak et al., 1977; Pashek & Brookshire, 1982) を、常識と照合しつつ (Sandra ら, 1985)、主題を頂点として階層的に結合して理解する (Brookshire & Nicholas., 1984; Wegner et al., 1984; Brookshire & Nicholas., 1985) 能力が保たれているためと考えられよう。今回、失語

症者群のカテゴリー別質問の正答率が健常者群と同様、「主題」を頂点として、以下同様の傾向で低下したのもこれを示唆しよう。

今回、無修正のニュースでは速すぎるという数名の言語聴覚士の予想に拘らず、良好な結果が得られた。これは、Brookshire と Nicholas(1985)の呈示速度の談話の理解への影響は少ないという説と相違しないと思われる。

談話の理解と失語症のタイプについては、Stachowiakら(1977)は失名詞群が、Brookshire と Nicholas(1984)は非流暢群が良好とした。綿森ら(1978)のアンケートでは非流暢群が、テレビやラジオをよく理解できると答えている。ニュースを用いた我々の結果でも、非流暢群の方が良好な傾向があった。そこで、非流暢群（ブローカ失語群）におけるニュースの理解について考察する。

一般に、解答が常識から類推できるならば、失語症者の成績は向上する(Caramazza et al., 1978)が、特にその傾向がブローカ失語群で強いとする報告がある(Kudo, 1984; Deloche et al., 1981)。また、Goodglassら(1979)は、文法的に複雑な一つの単独文より、接続詞で結ばれた文法的に易しい2つの文をブローカ失語群はよく理解するという。

一方、ニュースは日常の出来事を、その生起順に叙述するなど定型性の強い談話である。また、接続詞が多いため長くはなるが、主に能動文が使用される(稲垣, 1975)。これらのニュースの性質と前述のブローカ失語群の特徴とが、今回のような結果を生じさせたとも考えられる。

ニュースの得点と SLTA 失語検査の単独文との相関は、軽度失語群の口頭命令以外有意な相関がなかった。談話と単独文の相関は低いとする先行研究の結果は、概ね支持してよいと思われる。

健常者では高年齢ほど談話の理解が低下する(Dixon et al., 1984)。本

検査でも健常者二群間に有意差があり、失語症者でも年齢の影響を考慮すべきである。

今回、健常者壮年群を事務職とし、失語症者が同種の職業に復帰する際の、一つの目安を得ることも試みた。その結果、健常者壮年群の得点分布域に位置した48%の失語症者は、ニュース的な談話の理解に関しては復帰可能と考えられた。もちろん、実際の復職にはこれ以外の言語、非言語的能力が関わってくる。しかし、そのような軽度失語症者のCommunicative ADLともいえるべき能力は、現在まで殆ど検討されていない。日常の刺激を検討対象とした今回のような方法は、そのような能力の評価に有効と思われる。

最後に、失語症者が単独文よりニュースを良く理解するという事は、それらを聴理解の訓練に積極的に導入することによる有効性を示唆している。

まとめ

失語症者に日常の談話の一つであるラジオニュースを無修正で聴かせ、その理解を検討した。その結果、失語症者は単独文よりも、ニュースをよく理解し、特に軽度非流暢群は良好で、年代の一致する健常者と有意差がなかった。以上より、失語症者は日常のニュースをよく理解して聴取していると推察した。